

# 九十九里郷土研究会 郷土研通信

## ともに歩む

### 会長 内山 いつ

本会は、「郷土に関するあらゆることを研修対象とし、その成果を郷土に還元し、郷土がより元気になるよう貢献する」ことを目的としております。

今年度も、去る四月十五日に総会を開催し、年度のスタートを致し、新たな心で事業計画に添い、歩き始めました。幸いにして、会員各位、それぞれのカラーを発揮され、研鑽を重ねながら、共にすすんでおります事に深謝を申し上げます。

### 平成二十九年度 役員

- 名誉顧問 木島 里八 (片貝)
  - 顧問 川島 秀臣 (西野)
  - 会長 内山 いつ (真亀)
  - 副会長 齋藤 功 (下貝塚)
  - 事務局長 村松 英一 (田中荒生)
  - 会計 古河 達也 (不動堂)
  - 書記 伊東 邦子 (東金市堀上)
  - 監査 鈴木 千穂 (片貝)
  - 高橋 悦子 (真亀)
  - 清水 興 (片貝)
  - 山本 眞之助 (作田)
  - 山本 眞之助 (作田)
  - 小澤 君代 (真亀)
  - 染谷 佳子 (作田)
  - 野嶋 壽子 (片貝)
  - 藤代 智子 (田中荒生)
  - 桜井 宏樹 (真亀)
  - 山口 勇子 (片貝)
  - 内山 菊敏 (真亀)
  - 谷川 良枝 (片貝)
  - 本保 弘文 (真亀)
- 編集委員 編集委員

### 第5号

会長 内山 いつ  
事務局長 村松 英一

事務所 町 5 7 5  
九里 6 0 0  
十荒 1 4 1  
田中 1 0 0  
電話 7 6 -

会員数 59名  
平成29年5月1日現在

設立 平成22年  
4月17日

### 平成29年度 事業計画

月	日	曜	事業内容
4	15	土	総会/記念講演 真忠組と大村屋 講義 齋藤 功氏
5	20	土	講演 徳富 蘆花と 関寛 齋 講義 齋藤 功氏
6	17	土	史跡散策Ⅰ 茂原方面 大綱白里・染谷 佳子氏 小澤 君代
7	15	土	会員発表
8	19	土	休会/役員会
9	16	土	史跡散策Ⅱ 匝瑳・旭方面
10	21	土	町のビジョン 町長 大矢 吉明氏
11	1~3		町文化祭
	18	土	会員発表
12	16	土	講演 齋藤 功氏
1	20	土	新年会 会員親睦交流会
2	17	土	講演/伊能忠敬 妙覚寺住職 野時 巧氏
3	17	土	休会/役員会

特に、今年度は、『会誌伊和志』の第二号を、一年がかりで編集・発刊に努めたく、考えております。「全会員参加型」に仕上げようと願っております。更に、今回の第二号では、「戦中戦後の体験」という思い出の特集を組む、郷土にとり、未来に向かい貴重な資料として役立つ冊子にと、望んでおります。

また、「年間事業計画」としては、これまでの講演、会員発表の他、大綱白里・茂原方面と匝瑳・旭方面という、二回にわたる史跡散策を計画し、座学だけではなく、現地訪問・史跡散策も予定してまいります。これは、町バスを利用して実施できるように、計画を進めてお

ります。お陰様で、八年目に入った本会ですが、ともに歩みながら、会員各位の一層のご支援・ご協力を賜りますようお願いしております。

四月十五日、本会総会に於いて、会長挨拶に続き、事業報告・決算報告・29年度事業計画などを、各々円滑・円満に承認して頂きました。しかし、三月の役員会では、講師の依頼について、ただ「お願いします」とするか、あるいは課題を提案して依頼するかで迷いました。

また、探訪・散策活動に於いては、参加人数の把握や運手手段、現地の状況等を考慮した上で計画しなければならず、これまでは、個人個人の協力を得ながら、事故なくやって来ましたが、高齢者による車の事故が多いこの頃です。沿つて、会員皆様方の協力を得ながら、会長を核心として、会員の期待に沿うよう邁進して参りますので、宜しく願います。

さらに本年度の大きな目標に『会誌伊和志』の第二号の発刊を予定しております。全会員「参加型」の文集です。是非是非参加をお願いします。もう一つお願いがあります。平成二十年に没後200年を迎え、香取市では、忠敬の銅像を建立するため、募金を呼びかけています。

その期間が二十九年九月までで、二十九年にJR佐原駅南口ロータリーに建立予定。五万円以上を寄附した法人・個人については銅像台座に募金者名が刻印されます。

本会もこれに賛同し、一口千円の募金をお願いし、台座に会名を刻み込んで頂くようと考えております。ご協力を願います。

### 更なる内容の充実を 平成29年度事業の紹介

事務局長 村松 英一

故篠崎青童・本名篠崎純一氏の経歴

昭和7年3月23日生まれ
22年頃より作句
29年 白涛俳句会設立
35年 好日俳句会へ入会
36年 句集『歟だこ人生』発刊
40年 好日賞を受賞
57年 句集『青いわらべ唄』発刊
60年 研究書『九十九里の方言』発刊
61年 『つくも』創刊主宰
平成4年 句文集『獅子の笛』発刊
8年 記録集『西野獅子連物語』発刊
9年 句評集『青い選後評』発刊
10年 合同句『ながらみの歌』発刊
13年『青童一代記安来節だよ人生は』発刊
14年 合同句集『すえひろの歌』発刊
19年 青童句文集『あこがれて』発刊
23年 合同句集『つくも』三百号発刊
俳句協会々員 九十九里俳句会主宰等

本文は、平成29年2月23日、故篠崎青童氏の葬儀の際に桜井氏が述べられた「弔辞」を青童さんに感謝を込めて掲載しました。(編集委)

お墓に刻んだ句 ふきのとう  
母あるゆえに 村を出ず  
青童

青童さんを偲ぶ

平成二十六年の秋頃であつたらうか、俳句人生六十年以上も歩んでいた青童さんが、突然、活動に終止符を打たれた。体調の悪化に、恐らくご家庭の意見に従い、選んだ道であつたのでしよう。

私は、流れてお十代の頃より青年会の先輩としてのお付き合いで、約六十歳の歳月が酒が呑めなくなると、時折、自宅附近を通る際は一寸寄り、励ましていました。おがいてるよう、励まし、生きて頑張りなすよ！と、病んでる身に孤独感を抱かず、体調の管理に負け、ついつい入院生活、やや良くなると退院、何度かそんな日々が続く。

その頃、地区の郷土芸能の方々の企画で、神社の境内で野外ステージを組み、発表会の準備が始まりました。いつも「安来節」を披露する青童さん、歩くのも苦痛の日々であつたが、歩行器で一歩一歩懸命に練習を重ねたらし、想定外であつた「安来節」を幕間に踊り始めました。私は、意外であつたが、大変、大変、小銭入れを出して、箱ティッシュを取り、一個づつ包み、「おひねり」を舞台めがけて投げ、「頑張り！」と声援を送った。「生涯最後の踊り！」と喜んでくれました。本年二月頃、本会の資料を持参しましたら、また入院とのこと、病院でも読めるそう、娘さんに依頼して帰りましたが、その数日後、訃報を受けました。信じられず、深い悲しみで一杯です。あのユーモア溢れる「安来節」が見られぬと思うと残念でなりません。きっと今も友人たちを楽しませているでしょう。ありがとうございます！(内山いつ記)

純一様 今生に己が思いを 成し遂げて  
遠き旅路に 立ちし青童  
修美



さようなら、ありがとう！ 青童さん

桜井宏樹

青童さん、あなたとは六十年のお付き合いをさせて頂き、私の人生の良き相談相手の先輩でした。或る日、青年会の帰りに俳句の会があるからとお誘いを受けましたね。回を重ねる度に、あなたのユーモア溢れる会話と指導力で、益々会を盛り立ててくれました。

思い起こせば、昭和三十年、白涛会が結成され、毎月の俳句会を通じ、文化活動が始まり、『句集つくも』を四百号まで続けられました。青年会においても、会報を発行、そして、演劇の公演も計画され、三回もみんな楽しく舞台を務めさせて貰いました。

昭和三十六年には高村光太郎智恵子の碑の建立に大いに努力され、大海原の前に素晴らしき碑が出来上がりました。昭和四十七年、あなたが四十歳の時、西野の獅子芸を復活させたことは大変な偉業でした。

昭和六十年に白涛会を止められ、「つくも俳句会」を立ち上げ、山武郡内に四教室も開校され、文化サークルとして大勢の俳句愛好者に感謝されたことでしょう。また、『千葉日報』の俳句選者に抜擢され、十年間も大活躍されました。平成二十二年より「九十九里郷土研究会」が設立され、顧問を務められ、いろいろな講話を聞かせて頂きました。特に、地方の方言集は好評でした。

まだまだ語り尽くせないほど、思い出があります。もうあなたの「安来節」の名人芸、そして、「番場の忠太郎」も見られぬと思うと、胸が一杯になります。どうか安らかに眠りください。

隠れた町の史跡(5)

栗生新田の上人塚(しょうにんづか)



地名は、その土地の歴史を表します。本町には江戸時代の旧村名である大字の西野・真亀・下貝塚・小関・片貝・作田や小字には村の歴史を窺わせる地名が残っています。その一例が栗生新田の上人塚です。「九十九里町誌」(上巻)に故田村敬氏の「九十九里町字名考」があり、「行者が埋葬されたところとする地域もある。栗生の村の発生は片貝村よりも古いと見られているので、あるいは『七里法華』と関係があり、経文仏具を埋めた地か」とあります。戦国時代初期、土氣を居城とした酒井定隆は、日泰上人との約を果たすため、領内一円に「顕本法華宗」への改宗を命じました。その時、真言宗であつたこの地の寺は、経文仏具類を埋めたと言ひ伝えられ、その推測の方が事実に沿っているようです。(齋藤功)

智恵子とふるさと

加藤 八重子

五月二十日、高村智恵子さんと同じ誕生日。それだけでも私にとつては、素晴らしいことだと思っております。故郷に帰ると、十分位の所に智恵子の記念館があったり、その当時は立派な記念館が、という感じで、さりげなく流してました。私は結婚して、西ノ下に住むようになって、また、智恵子さんと深い関係の斎藤俊太郎さんと同じ自治区内でした。区で何か行事があると皆で集まって行動を共にしました。また、斎藤さんは、人形の製作所を営んでいました。中を見せて頂いたこともありました。今思えば、とても懐かしく思い出されます。智恵子さんは身体をこわし、療養していた田村別荘は、今の「あぶらや」さんのテニスコート中央通りの松林の中にあり、そこに住んでたそうなんです。以前、その辺りに「案内板」が立てられていたのですが、古くなり、折れてしまつたようです。「その後は判らない」と、中村さんが話していました。いろいろ調べて見ますと、とても奥が深く、知らないことがばかりです。でも、こうした関心を持つことが出来たのは、郷土研究会に入会して沢山のことを学ばせて頂いたお陰です。ふるさとを偲びながら、思いのまま書いてみました。

写真で見る <2> 九十九里町の史跡

不動堂海岸に立つ海難供養塔

九十九里浜で溺死や海難、行方不明等で命を失った人が多数おり、その人の霊を弔うための供養塔も多い。この供養塔もその一基で、ひっそりと海に向かつて建っている。



表面	有縁無縁 妙法 海難供養塔 万各靈之
裏面	昭和二十七年 施主 阿部鉄次郎

戦記物語(二) 満蒙開拓青少年義勇団として

長岡 真雄

ソ連軍によつて国境は破られ、東滿綏芬河と西方里方面からソ連軍は凄しい勢いで進行して来た。一時、静まり返った時、急に関東軍から命令があり、後方へ退くこととなり、他の部隊と一線から後方の警備に当たると。この命令は、ソ連軍が攻めて来る半月くらい前のことでした。数日後、後方に退いて部隊は、全員が玉砕したと聞きました。友愛部隊として非常に残念でなりません。(注)昭和二十年八月九日、ソ連は日ソ不可侵条約を一方的に破棄し、満州国への侵攻を開始。国境付近に取り残されて在留する成人男子は「国境警備軍」とし、ソ連軍と対峙した。(編集委)

我々の部隊は、三々五々に別れ、後方への警備を続行し、ソ連兵がいつ激突するか分からない状況の中で、緊張感が生じての行軍が続きました。疲れ果て、歩きながら居眠りをした時もありました。突然、遠くから一斉射撃を受け、反撃に出ようとしたが、ソ連兵は遠ざかっていった。日々に命懸けの行軍であるが、疲れを忘れ、我が小隊は、ある小高い山岳地帯に辿り着きました。その矢先に再びソ連軍は動き始めたのか、銃の音が響き、足場の悪い所で、一陣地を構えろとの指示に従い、戦友同志は敵との一戦に決意すること、死の覚悟を決めての作戦であることを、観察手は、岩の陰から双眼鏡でソ連軍の気配をいち早く探り、人影の動きを見極めるなど、前方の道路に向かつて稲穂が実っている田圃で、後方が山林であることが確認できたので、時間を経つにつれ、油断の出来ない状況の中で、観察手が叫んだ。「道路の左の方からソ連軍の戦車が来ている」と。素早く確認でき、一人の兵士は、手榴弾を持って仕掛けに走ってくれた。

無事に引き返し、我等は銃を構えて、何時でも反撃に出られるよう、待機している時に、一人の兵士が壕の中で流れ弾に撃たれて死んでいるのを確認、誠に残念だ。「ヨシやつて、やつて、やつてやるぞ!」と、死の覚悟で反撃に出て、戦友の敵を討つて出ようと思つた矢先、小隊長が叫んだ。「皆は後方に下がらなさい」と。歩み始めた。ソ連兵は容赦なく討つてくる。その度に皆が草むらに身を潜め、そして、様子を見ながら再び歩き始めた。歩いて歩いて、夕暮れが近い時に、外の小隊と別れ、再び歩き始めた時、ソ連軍が再三にわたつて撃つてきた。戦友同志は励まし合いながら警備を怠らなかつた。行軍に行軍を続ける若者同志は、疲れを知らない。ソ連兵との一戦が何時始まるか、緊張の連続でも、戦友は皆、元気が、歩いてる最中、誰かが叫んだ。「向こうに敵がいるぞ!」と。人影を確認すると、勢いよく、私と戦友同志の間を飛んで来たものは手榴弾であつた。「アツ!」と。運よく、その手榴弾は不発で、命が救われた。戦友同志は、「行くぞ!」との掛け声で攻めた。戦友同志は、相手が少人数で、向かつて来る様子もなく、我が戦友同志は油断なく包囲した。敵は銃を上げて降参しているようだ。敵に向かつて拳銃で刺し殺そうとしたが、いざと言う時に、小隊長は叫んだ。「武器を取り上げて逃がしてやれ」と。敵は一目散に遠ざかっていった。次の警備作戦に出て、山岳地帯を歩き始めた時、小隊長は、大声で叫んだ。「一人の犠牲者をおも出してはならないぞ!」と。戦友同志は、お互いに励まし合いながら、飲まず食わずの行軍が続いた。ソ連軍は、何時、反撃に出るとも限らない。お互いに気を引き締めて、次への作戦を練つた。(続)

(注)昭和20年5月の時点で、政府や軍の関係者は、既にソ連国境から撤退を開始し、入植開拓民は取り残された。とりわけ青少年義勇軍の大部分は置き去りにされた。ソ連軍の攻撃や中国人の襲撃に遭いながら、満鉄職員らに誘導され、満鉄で引き上げに成功した場合や、徒歩で延々と逃げ延びた者、ソ連の捕虜となり、シベリア抑留で生き延びた者もいるが、最終的には日本に帰国できたのは11万人程度とされ、16万〜21万人は現地やシベリアで骸を晒すことになったという。(編集委)

# 九十九里と勝海舟

染谷 佳子

幕末、維新期に活躍した第一人者、勝海舟の名はよく知られている。かの有名な海舟が我が九十九里に数回訪れている。幕臣であった彼は、新政府になり、役職についた故、江戸の赤坂水川にあつた屋敷が度々襲撃されたので、あつた。海舟は、身を潜める為に、我が九十九里の知人である藤代昌琢宅を訪ねて居り、近くに住む大頭氏宅へ一ヶ月程、逗留していたとの事である。

さて、数年前に郷土研で木島先生による講義で「九十九里と勝海舟」というテーマで、海舟が九十九里浜の地引網の様子を詠んだ長編の漢詩を御教示頂いた。海舟は、実によく地曳網の様子を観察しており、浜辺での商人との取引の様子なども見事に描いている。

傷心の身にとつて、この大海原で、たくましく生き、大漁に湧く様子に、おのれの小さな心配事など気にせず酒を飲み、鯛をさかなにしたがら、どんなにか心を慰められたらうか？九十九里の海は、はてしない力を持つている。次に海舟の詠んだ長編漢詩の口語訳を紹介する（木島先生の訳）。

ここは日本の上総の国、陸地は真つ直ぐに東に進めば、先はもう海に接している。南は太東岬。北は犬吠崎である。二つの岬は角のように突き出して海岸を抱いている。海辺に打ち寄せる猛り狂つた潮は、千雷の響きを轟かせ、じかに太平洋の彼方より寄せてくる。

この九十九里浜は、湾全体が九十九里(約六〇km)もあり、漁獲が大きな利益の中心を占めている。最盛期には、イワシの漁獲高は升目にして千万魁もあり、それは乾して干鯛を作り、魚油を絞つて粕とし、ともに肥料として広く使われている。

時は今、明治九年(一八七六)ひのえねの二月の初め、私は気儘に漁の様子をゆつくり見物しようと思ふ。海面の色で鯛の群れが集まつていることを判断し、海上に飛びまわり、群がる鴨で鯛の所在を知る。

船足の早い船は、突き進んで折り重なる波を切り、遠く波の真中のはるか沖合いに向かつて漕ぎ出して行く。沖で網を下ろして左右に張つて引き、漕ぎ回る櫓の手はしばしも休むことは

# 十二月の発刊を目指して

「会誌・伊和志」第二号

先日の総会に於いて、本年度の最大の事業として、「会誌・伊和志」第二号の発刊が決議されました。この会誌は、会員の「全員参加型の郷土誌」という趣旨で発刊されているもので、少しでも郷土の発展に貢献できればとの願いがあります。

第二号では、特に「戦中戦後の体験」という特集を組み、未来に向けて貴重な資料の収集に努めたいというねらいがあります。

その他では、歴史等に関する小論文の「論筆をお願ひし、これまでの例会の講演・発表、又は啓発的な内容の「学ぶ」では内山氏、染谷氏、村松氏、古川氏などの原稿を予定し、この他、会員による随筆、記録、日記、感想文、思い出などを記した「つれづれ」を予定しています。

- △編集委員会△
- |     |      |
|-----|------|
| 委員長 | 本保弘文 |
| 委員  | 川島秀臣 |
|     | 村松英一 |
|     | 伊東邦子 |
|     | 内山いつ |
|     | 染谷桂子 |
|     | 齋藤功  |
|     | 古河達也 |

無。海辺では引き手が網に蟻のように集まり、真網逆網が競つて網を引き合う。網袋いっぱいイワシは靴のように膨らんで袖網にまではちきれそうた。

鯛はたちまち大勢のかつぎ手によつて運ばれ、銀白色の山がしばらくの間に積みあげられる。積み上げられた鯛の表面は、盛んにとびはねまわり、銀鱗がピカピカひらめき、鯛と鯛が触れ合つてピチピチと小声で泣くように聞える。

しばらくして商人たちがやつて来て、相場を決めているのが見える。しかし、それも立ち話で、たちまち決まつて、数をかぞえて手順どおり決まりが済む。

昔から「百聞は一見にしかず」というが、全くその通りで、一網千金の言葉は全く嘘偽りはないことが分かった。私などは、もともと富国の経綸などは持ち合わせているわけではないのだから、鯛をみると酒を酌んで、取り越し苦労はやめよう。海舟居士

前号では会員の殆んどの方々が投稿され、六十四ページに及ぶ冊子になっており、第二号も同様なものを考えています。また、前号からの反省として、活字を大きくしよう、本会報で使用している活字(11ポイント)で、原稿の締切りは七月十五日まで、期限までに書き上げ次第、会長又は事務局長に提出することになっていきます。ご協力をお願いします。原稿が提出され次第、パソコンに打ち込み、編集委員会を開き、校正します。勿論、本人には十月二十一日の例会の折に目を通して頂きます。この会誌の発刊に当たり、会員の負担金は一口千円で、本誌を二冊配布します。発行は十二月十六日頃を予定しています。

## 事務局日誌

記/村松英一

- ・ 3月25日 総会開催の通知を発送
- ・ 4月10日 総会資料等の印刷・準備
- ・ 4月15日 平成29年度総会
- ・ 4月23日 記念講演講師 川島秀臣氏
- ・ 2月25日 FMラジオの取材に村松が対応
- ・ 5月6日 県立関宿城博物館が干鯛について小林實氏を取材(事務局対応)
- ・ 5月10日 6月の史跡散策地の下見(内山会長・本保・村松)
- ・ 5月10日 5月例会の資料の印刷・準備
- ・ 20日 5月例会「徳富蘆花と関寛齋」講師 齋藤 功氏
- ・ 6月10日 史跡散策資料の印刷・準備
- ・ 6月17日 史跡散策(大網白里・茂原)

戦争中、軍国主義の教典として利用された『教育勅語』が大手を振つて姿を現す世の中になりつつある。現政権は「憲法や教育基本法に反しない形で教材として用いることまで否定されていない」という。そもそも「主権在民」である戦後、それを戦前の「主権在君」の時代のもの、どう活用すべきというのか？何となく「一旦緩急あれば義勇公に奉じて天壤無窮の皇運を扶養すべし(万一危急の大事が起つたら皇に奉じて大義に基づいて勇気を振るい一身を捧げて皇室国家の為に尽くせ)」という項目が透けて見えるのである。この勅語は、昭和23年(1948)6月に衆・参両院で排除・失効されているのが、「閣議決定」だけでは議会軽視であり、立法とは成り得ないのであるか？(本保)